

□症例研究

冷子の世界

——分裂病の少女との面接過程——

藤繩 真理子*

Iはじめに

思春期が精神発達における危機であることは、言を新たにするまでもないであろう。それは、思春期において内因性の精神病が顕在化しやすいことと、精神病とまではいえない場合でも、一時的にせよ多彩な精神病理現象が生じやすいという二つの点から言われるものであろう。

そして、精神病理現象に思春期心性がからんで治療が複雑になることが言わわれている。しかし近年、精神分析（療法）的治療の対象が、いわゆる神経症圈から、境界例・分裂病圈へと拡大されるにつれ、思春期を発症の誘因（年齢的誘因）としてだけとらえるのではなく、症状理解のためにこの時期の心性を理解しようとする動きが治療者の中に強くなってきていくようと思われる。

ここで紹介するのは、思春期において精神分裂病状態を呈し、1年余りの自閉の後、学校には復帰したものの、離人感、無気力、幻視、独語による思考漏洩等を訴えて来談した少女—冷子の事例である。（「冷子」とは彼女自身の書いた自叙伝的小説の主人公名である。）

初回面接での冷子は、動作全体が緩慢で、治療者の問い合わせにボソボソと力なく応ずるのみである。「以前よりしましたが毎日が夢のよう。」（1年目は毎週1回、2年目から隔週面接にし、第31回以降は1～2カ月に1度のフォローアップである。）

II症例

冷子；来談時16歳、某女子高校1年
<現症歴>中学3年（14歳）の1学期ごろから、夏休みは参考書をノートに丸写しにするという仕事を続け、2学期には1日登校したり後は自室に閉じこもり無為・昏迷様状態が続いた。日常の洗顔、食事も介添が必要だったとのことである。

母はこの冷子の状態に驚き、手伝っていた店をやめて、それまで全面的に冷子の世話をしていた祖母の手から引き戻したが、しかし冷子の状態は回復せず、登校しないままで中学は卒業した。私立高校に進学したが相変わらず自閉的なまま登校せず、1年留年した。2回目の高1になって登校ははじめたが、毎日が夢を見ているようである、定められた学課以外に自発性はみられず、ほとんどの時間は本を前にしてすわっているだけだった。このような状態が続き、冷子は、心配した母に伴われて筆者の所属する相談室を訪れた。（×年11月）

初回面接での冷子は、動作全体が緩慢で、治療者の問い合わせにボソボソと力なく応ずるのみである。「以前よりしましたが毎日が夢のよう。」（1年目は毎週1回、2年目から隔週面接にし、第31回以降は1～2カ月に1度のフォローアップである。）

Psychotherapy of a Schizophrenic Girl
* 京都大学教育学部、Mariko Fujinawa: Clinical Psychology, Department of Education, Kyoto University.

医師の診察の結果、精神分裂病の診断で薬物治療がなされ、それと併行して心理療法も必要との指示で面接が開始された。

〈家族状況〉父・母・冷子・妹（1歳下）という家族構成で、父は店を営んでいた。最近まで母方祖母が同居しており、父の店の手伝いをしている母にかわって冷子を幼少時より養育していた。

乳幼児期に特記すべき病歴はないが、どんな子供であつたかについては、母は一切を祖母にまかせきりであったため、全く情報を得られない。祖母は冷子にベッタリと世話をやき、生きがいのようにしていたといふ。

勉強は好きで成績は良いが、友人は一人もなく、子供仲間に異和感を感じ、とけこめず、またよくいじめられたといふ。

妹は、演劇部に入り活発で目立つ生徒であるらしい。同じ高校で同学年になっていた。

III 面接経過

〈第1回～第8回〉×年11月～(×+1)年1月 絵を習いたいという冷子に、治療者は画集を見るところや、治療場面で油絵を描いてゆくことを提案した。画集をゆっくりしたりペースで見てゆき、時々そのペースが大変おちて、しばらくジーッとして、ハッピと頭を振る。このようなことが、以後8回まで面接中に何回かみられた。

「廊下を歩いている時、時々体がしびれることがある。私って……まつ白なの……」と語る一方、画集を見ながら、キリストが十字架にかけられている絵を指して、「これ血出でないね。テレビでキリストの物語見た時も血出でいたよ」と無表情に語る。絵の題材を2人で挙げ、結局物語の一場面、「北極で船が遭難し、吹雪の中を旅するが、親子3人が雪の中で死んでしまったところ」を描くことになる。北極の雪の中での凍死は、冷子の閉ざされた凍るような心の内を暗示しているように思われた。

絵を描くにつれ、道具の使い方や描き方などを積極的に治療者に聞いかけることが増えた。

〈第9回～第14回〉(×+1)年1月～4月

冷子の唯一の話し相手であり可愛がっている手の文鳥を描く。「この文鳥ね、前は2羽いたけれど今、卵抱いているけど、雄がないから孵化しない。そのうち腐ってくるから捨てるの」と冷子は無表情に語った。治療者が「かわいそうね」と言っても反応はない。

話す時間は増え、その内容も「空はもっとスカッと推きたいのにどうしても暗くなってしまう」「カーテンの柔かい手ざわりのかんじがでない」「木はもっと生き生きとしたかんじに描きたいのに……」などと、自分の状態を投影したような発言が多くみられた。

そして自分の状態についてもより確かに見つめられるようになり、「現在に不満なことは気付いてるだけれど、それをどうしようともしないでいる」「授業中にどんどん迷惑が広がって、それを口の中にブツツ言つて、ハッピと気がつくと止まる」「心に腹をはつていいみたい。それは中がねわいらしく……」とも語られた。

このころ、好きな物語として、冷子は次のような話を添々と、むしろ楽しそうに語ってくれた。“船上に2人の子供がかくれて乗りこみ、そのまま沖に出る”。その船で暴動がおこって、子供たちは船員2人と仲間になって他の暴動者を皆殺した。漂流していると、ある時、向うから船が来るので助けを求めるけれど、その船も漂流船で、その船長は甲板に立つまま死んでいた。内臓はカラスに喰いちぎられた。そのまま漂流しているうちに、食べるものがなくなつて、船員1人が殺されて他の3人に食べられてしまう。やがてある島に流れついて、そここの土人と一緒に冒險を続けてゆくの”。この物語は決して怪奇小説などではなく、むしろ最後の冒険の部分こそが話の内容なのだが、冷子の心の内には、ここで語られた部分が焼きついでいたのだろう。

「まわりがみんな私に敵意を持つていて思

が赤いといいのかな……」

また、徐々に自分の変化に気付き出し、また友人との違いを感じはじめる。「『風立ちぬ』のヒロインについて、みんなは彼女が“感情をおし殺していく”と言うが、私は、彼女におし殺す感情をしないように思う。みんなが“感情をおし殺していく”なんて感じることをみると、みんなずいぶん感情を感じているんだなと思った」「保健で、分裂質とかという分類を習った。そういうしたら、そもそも違うところにいるってことあるらしいし、人とは違つてもいいんだなって思えるようになつた」「まだ独り言をブツツ言つてけど、それは現実と距離があつて、そのしんどさを軽くするためるために言うみたい」

このころから水泳教室に通いはじめ、「水中に浮いているといい気持ち」と言い、夏休みはほとんど毎日、以後週1回通い続けた。その先生に相談に行つたりして、他の先生に相談に行つたりしていた。中2の終りに外でその先生の車が横を通り、この時、私は、この先生に見つめられていた、見張られていると思う。そのころは今と逆に、感じなくていいことを心でビンビンひひいていた。人がどんなに賞めて、心の底ではバカにしていることは分かっていた。それがだんだん強くなつて、夏ごろはまわり中から見張らられていて、こわくて逃げ出したい気持ちだつた。その、こわいという本当の感情をおさえつけているうちに、何を感じていいのかわからなくなつてしまつた。学校から帰ると、何かいやらしいことを怒鳴つていた。10月ごろ、怒鳴つていううちに、そことばと一緒に体の中のものがスーと抜けて、自分がくずれていくような、しほんでもゆくようなかんじになつた。そして学校にも行けなくなつた。そのころは、考へていることが何でも口から出いでいた。考へていることが皆に知れて恥ずかしかつた】

このころから冷子は、自分の症状、友達とうまくいかないことを悩み、どう対処したらいいのか、を盛んに問うようになった。

〈第30回～第42回〉(×+2)年1月～6月

この時期、冷子は所属していた文化系クラブの部長になり、現実の学校生活には適応しているようだった。そして、現実生活の中で自分の感じていることを徐々に認められるようになる一方で、やはり底に流れれる分裂病世界や変身の予感などが語られる時期である。

「自分の感じていることがはっきりつかない。私が最も心は冷えてゆくのに……」「時々、何の理由もないのに怒りががっそりコッヒーの底からふき出していく。ブツツ言うのは人の悪口を言っているみたい。人の悪いところをバッヒーと直感して、すると『アホ、アホ』ということばが口からとび出してしまう。それを出すまいとしておさえこんでかためてしまった。何か底の方で、そのかたまつてしまつた部分が音を出しているみたい」「小さいころからいつも私はのけものにされていた。ジャンケンをして他の人はしめし合せていて、いつも私が鬼だったし、私が近寄るとなッと逃げられたり、いじめられたりして、附属中学に受けた時、喜こんでもらえず、無視されていたことがはっきり分かった」そして第29回、冷子ははじめて発症状況を語った。

「中1の時、体育の先生が私を見ているような気がして、その先生が私のことを好きなんだと思いこんで、他の先生に相談に行つたりしていた。中2の終りに外でその先生の車が横を通り、この時、私は、この先生に見つめられていた、見張られていると思う。そのころは今と逆に、感じなくていいことを心でビンビンひひいていた。人がどんなに賞めて、心の底ではバカにしていることは分かっていた。それがだんだん強くなつて、夏ごろはまわり中から見張らられていて、こわくて逃げ出したい気持ちだつた。その、こわいという本当の感情をおさえつけているうちに、何を感じていいのかわからなくなつてしまつた。学校から帰ると、何かいやらしいことを怒鳴つていた。10月ごろ、怒鳴つていううちに、そことばと一緒に体の中のものがスーと抜けて、自分がくずれていくような、しほんでもゆくようなかんじになつた。そして学校にも行けなくなつた。そのころは、考へていることが何でも口から出いでいた。考へていることが皆に知れて恥ずかしかつた】

このころから冷子は、自分の症状、友達とうまくいかないことを悩み、どう対処したらいいのか、を盛んに問うようになった。

〈第30回～第42回〉(×+2)年1月～6月

この時期、冷子は所属していた文化系クラブの部長になり、現実の学校生活には適応しているようだった。そして、現実生活の中で自分の感じていることを徐々に認められるようになる一方で、やはり底に流れれる分裂病世界や変身の予感などが語られる時期である。

ただ、汚なくて、野蛮で、いやらしいかんじがする」「嫌いな友達を見ても、そういう性格もあるんだと正當に感じられるようになりたい」「お母さんの具合が悪いと、死ぬのちがうかと思つて涙出していくこのごろわけもなく泣けてくることがある」「するこことたくさんあるし、たのしいことも喜びもある。悲しみや苦しみもあるけど、何も感じないよりはまし」と語る一方で、分裂病世界を垣間みせる次のようなエピソードが語られた。

「小学校3年のころからトイレで用を足して立ち上がる時、パツと別の世界に立ち上がったような気がした。だんだんその感覚を楽しむようになつた」「外から帰った時、迎えに出たお母さんには、私が誰だか分からんじやないかって気がしてドアをたたけなくなることがあった」「自分は今は地球人と信じてゐるけれど、そのうち宇宙人だということが分かるんじゃないかって気がしている」「夜、鏡を見ると、私の後に何か写る気がしてジッと見ている。それすると急に額中にシワが寄つてくる気がする。それで見ているとやっぱり変わらない。ホツとすると少し失望する」

そして「リルケの詩の存在への不信ってすごくびつたり分かれる」「ムンクは自分の内面をみつめすぎて傷ついたかんじ。恐怖とか不安とかよく分かる」「カフカの変身ってすごく現実感がある。あれ私の実感」など、芸術の世界の中に自分の内面と共感できるものを見出していった。

また、このころ盛んに、姫や童真についての話、チカンの話、性に関する話題が語られた。

〈第44回～第55回〉（×+2）年10月～（×+3）年8月

第43回の後、3カ月間の治療者の不在があり、第44回以降はほとんど現実問題の話題へと変わっていった。部長としてのクラブ運営のこと、大学受験のことなどを、絵筆を動かしながら語る。このころ冷子ははじめて人間像（しかし外人の男の子）を描きはじめていた。

文化祭をやりとげて部長としての任を終え、大学入試も全て合格。結局、某国立大学の理科系学部に入学し、第51回以降は月1回のフォローアップに切り換えた。第52回、冷子は“怒りのぶどう”を読み激したと言う。「特に、最後のところで、飢え死しかけた人にミルクを飲ませてあげるところが…

…」と言う冷子に、治療者は嬉しかった。

大学では某武道クラブに入り、練習の都合で寮に入った。

〈第56回～第64回〉（×+3）年9月～（×+4）年3月

9月末、自分から電話をかけてきた冷子は元気な声で、10月から1カ月前店でアルバイトを始めたと言つたが、面接を約束した10月はじめにやつてきた時は、うつて變つた沈んだ表情で、なかなか話しあなかつた。そして話はじめた時、冷子は治療者の前ではじめてボロボロと涙を流し、「みんなが私のことをバカにしてる」と泣いた。「学校でそれ違う先生が『ボーッとしてる』『アホや』と言う。同じ部屋の人が私の悪口を言つてるのが聞こえて眼れない」など語った。そして「頭の後がボボコッと出でてくる。ツーンとなつて白い膜をはつてしまふ」と身体異常感がにわかに強くなつていた。

治療者は、10月毎週面接することを約束した。その間に、冷子は妄想と現実との板ばさみになり、最も苦しい時期があつたが、アルバイトは予定通り続けた。「道で歩いている人の話してることよく聴いていたらね、みんな自分たちのことばかり話してたけど、今まで私みんな私のこと話してると思ってたけど、そうやないんやね。今まで、自分の考えていることが現実だし正しいと思ってたけど、人はそれぞれのことしゃべっているのが現実だってわかつて、そしたら私の考え方って思ひ込みなんじやないかって思えて……」

またこんなエピソードも語られた。「森の中歩いたら、まわりがボーッとなつて、何の音っていうんじやないけど音がまわり中にいて、滝のところに出たの。滝っぽ見てたら、そこにも世界があるって気がして……。その世界に行つたかもしれない、行ってもよかつたかなつて気もした。けど踏んばって戻ってきた」

10月末にはこれらの訴えもなくなり、学校に戻ることにして、寮からアパートに移つた。

再び月1回の面接にもどし、冷子はクラブや大学は続け、アパートにてかから、人の悪口は全く気にならなくなつていていた。1月に来所した時は、急に「転学科したい」と言い出し、再び「頭の後がボボコッと出て……」と身体異常感を訴える。「部屋に入つたときに枕元に三角錐が見えて、そのう

しろから光が出ているのが見えた」「校庭を歩いていると、道の前の方にガラスみたいなのが見えて、そっちに行けばず道からそろそろして存在している感が強かった。しかし、その回の面接のみで再び元気を取り戻し、自炊して学校に通い、クラブを続け、また近くの水泳教室に幼児部のコーチとしてアルバイトをはじめたりと、現実生活はひろがつていった。その後2カ月後にやつてきた冷子はあでやかな服装で、元気に学校を續けていると語り、ケーキと手編みの飾りを持参、「長い間ありがとうございました」というカードが添えてあった。以後、何かあつたら連絡するということにしてあるが、今のところ大過なく過しているようである。

IV 考 察

1. 「冷子の世界」

冷子の世界は恐怖に満ちていた。冷子は父親の暖かい体に感じる臭氣を嫌悪し、母親の愛が自分満足にすぎないことを早くから見抜いていた。そして、やさしい大人が意識してふりまく寛大さにぞっとし、子供同士の競争は「みんなが組んで自分で自分をいじめる」体験となつて冷子の心に積み重ねられた。

小学生のころから「トイレで立ち上った時、別の世界に入ったような」体験を持ち、「帰宅した時、母は自分を認知できないのではないか」という不安はやがて、「自分は宇宙人かもしれない」明日は毒虫に変身しているかもしれない」といった存在の不確実感へと変形してゆき、周囲の人の顔は赤や黄や黒色をして、白いもやに包まれたものと写つた。しかも、やがて冷子はその不確実感に親和的になり、その感覺を楽しんだり、宇宙人が迎えに来るのをじっと待ち望んだり、鏡を見て顔が変貌するのを待したりするようになつたといふ。冷子は14歳の発症の前にすでに、徐々に共感的な人間社会から後退していったようと思われる。しかし、感情がないと訴える冷子は、その前には“感じなくていいここまでビンビン感じていた”時期があり、“私の感じていることって汚なくていや

らしいこと”だと感じたからこそ、何も感じないことで自分を守ろうとしたのかかもしれない。

「私の心に膜がかかるつたの」外でなく、中がこわいから膜をかけてしまう」という冷子の“こわい心の中”とは、文鳥の死をことともなげに語り、鳥に喰られた漂流者や食人の話を好きな物語の要約として語ることにみられを、まさに能「黒塚」の鬼女の、死体の累果とした闇のようなものではなかつたかと思われる。そしてその死体とは、敏感すぎる冷子が、傷つき、切り捨てるを得なかつた自己の一部ではなかろうか。冷子は第25回ころ、あたかもそれらの死体が蘇生しつつあるかの如く、「心の奥の方からボコッボコッと怒りが噴き出してくる」と語つた。底には、冷子を人間社会から追い出した周囲の者への“怒り”が存在していたかのように……。

3年半の治療過程を通じて、冷子は徐々に現実の中での生活をとり戻していったが、一方でこのような冷子特有な世界の認知は明らかに存続していた。しかも後半に、冷子がよく話すようになり、言語表現が豊かになるにつれて冷子の世界もまた筆者に開かれていたことから、筆者には、冷子が現実生活に足をつけて生きゆく力が出てくれるほど、その背後で冷子の世界は消えるどころかかえつて明確になってゆくようと思われた。

このことは、第14回頃と第50回頃との2回のロールシャッハテストを比べて、後者は、現実適応能力、共感能力、外界への反応性が増大している一方で、分裂病指標となる反応も増えており、変化が両面的で、幅が広がつたという印象であることにもうかがわわれる。

森の中を歩いていると、どこからともなく水音が冷子を誘い、滝っぽの中にもう一つの世界を感じた冷子は、そっちに行つても同じことだと感じる。冷子にとっては二つの世界のどちらに生きるのも同じことだったのかかもしれないが、とにかくそこで踏み止まり、戻ってきた。現在、その自分で選んだ世界の中で生きはじめた冷子

であるが、それまでのもう一つの世界はどうなつたのか、それは今後の冷子に何を残しているのかについて最後に考えておかねばならないだろ。

2. 身体異常感について

面接終期に訴えられた身体異常感は、来談当初の訴えにはなかつたものである。これは何を意味するのであるか。来談当初冷子は、自分の身体が自分でない、シャンとしない、力がはいらないと訴えていた。すなわち、そのころは身体異常感どころか、身体に実感さえなかつたといえるのではなかろうか。ところで、人が身體を意識するのは、第一にまず、身体に異常を感じる時である。その意味で、思春期は急激な身体の変化が否が応でも身体を意識させる時期であるといえるだろう。小学生5年というのはやや早すぎるとも思われる。その知識もなかつた冷子は驚き、そのあと半年間生理がなかつたといふ。冷子は身体の変化を拒否してしまつた。

身体異常感は確かに病的体験である。しかし筆者は冷子におけるこの訴えについて、そこには体感に基づいた実感があるようと思うのである。冷子の身体が冷子のものになつたからこそ、その異常感を感知し、訴えることが可能になつたと解することができるかも知れない。水泳教室の幼児部のコーチをはじめてから、身体異常感の訴えは消失している。冷子の身体は冷子にとつて、より親和的なものになつたのではないかと思われる。

3. 幻視について

幻視は来談時にも訴えられており、終結時形をかえてまだ存続していた。ただ、体験様式としては、視覚像がより明確になつていていることと、冷子にとってその幻視が不安をよびおこすものとしてでなく、1つの新しい体験として受け取られるようになつていていることとに変化がみられる。また、初期は、人の顔の変化といった対人関係的要因、現実世界の認知の歪みといったニエアンスの強いものであったが、後期のそれは、三恋愛妄想や関係妄想は消失し、「何かある」こ

とを知らせてくれていた幻視は存続したのではなくいかと思われる。

思春期のクライエントの症状の中で、(女子の場合)「何もない」感覚との関係でどちらうものは、思春期心性が深く関わっていることがある。それは、思春期過程における「何もない」感覚と、治療過程における「何もない」という動きが筆者の中にあつたかもしれないとも思われる。

(冷子の主治医は、京都大学保健管理センター三好暁光先生で、後半筆者のスバーバイスクをお願いし、冷子への理解を助けて頂いた。ここで深く感謝の意を表します。また、本稿を御校閲頂いた京都大学教育学部教授河合隼雄先生に厚く御礼申上げます。)

参考文献

- 1) 織田尚生：分裂病患者にたいする描画を媒介とした精神療法の接近、*芸術療法*、7；17-24、1976.
- 2) 笠原嘉、清水将之、伊藤克彦（編）：青年の精神病理、弘文堂、1976.
- 3) Guntrip, H.: Schizoid Phenomena, Object-relations and the Self. The Hogart Press, London, 1974.
- 4) スポトニツツ, H.: (神田橋脩治・坂口信貴訳)精神分裂病の精神分析—技法と理論—、岩崎学術出版社、1973.
- 5) セシュエー, M.A.: (三好暁光訳) 分裂病の精神療法、みすず書房、1974.
- 6) 土居健郎他：境界例の病理と治療、精神医学、12；466-500、1970.
- 7) 中井久夫：精神分裂病状から観察過程、分裂病の精神病理2、東京大学出版会、1974.
- 8) 中井久夫、山中康裕（編）：思春期の精神病理と治療、岩崎学術出版、1978.
- 9) 西園昌久：精神分析の理論と実際—精神病編—、金剛出版、1976.
- 10) 馬場あき子：鬼の研究、角川文庫、1976.
- 11) バリント, M.: (中井久夫訳) 治療論からみた退行—基底欠損の精神分析—、金剛出版、1978.
- 12) パンコフ, G.: (三好暁光訳) 身体像の回復、岩崎学術出版、1970.
- 13) 藤繩真理子：鬼と光のイメージの中で……、京都大学教育学部心理教育相談室紀要、4；137-144、1977.
- 14) ミンコフスキー, E.: (村上仁訳) 精神分裂病、みすず書房、1954.
- 15) ローウェン, A.: (池見西次郎監修) 引き裂かれた心と体—身体の背信一、創元社、1978.